各地で話題の病害虫

ラッカセイそうか病の初期病徴
千葉県農業試験場　長井雄治氏提供

カキクダアザミウマによるカキの被害果
岡山県農業試験場　逸見 尚氏提供

ダイズの茎疫病による被害茎
北海道立上川農試　土屋貞夫氏提供

ハラアカコブカミキリの成虫

ラッカセイそうか病

学名：*Sphaceloma arachidis* Bitancourt et Jenkins

英名：Peanut scab

本病は昭和51年夏，ラッカセイの主産地である千葉県八千代市，神奈川県秦野市において初めて発生が確認された新病害で，56年には茨城県下でも発生をみている。その後，発生面積は年々増加しており，57年には千葉県で7,485ha，茨城県で2,929ha の大発生となった。

発生は，７月中旬以降であり，地上部全体に生じるそうか病斑が特徴である。はじめ，褐色のかさぶた状小斑点が多数形成され，葉ではしばしばこれが葉脈に沿って連鎖状に融合し，病斑に穴があくこともある。特に新葉は激しく侵され，萎縮したり巻き上ったりして奇形となる。また子房柄が激しく侵されると，子実への栄養輸送が妨げられるため，著しい減収となる。

病原菌は不完全菌の一種で，ラッカセイのみに病原性を示す。病斑部の表皮やクチクラ層の直下に分生子層が形成され、ここに大型分生胞子，小型分生胞子が観察される。小型分生胞子は，無色単胞，楕円形で２個の眼点を有し，大型分生胞子は，無色，単胞または２胞，長紡錘形またはこん棒状である。

前年のり病植物の残渣が伝染源となり，連作ほ場で多発しているが，種子伝染はしないようである。本病は，低温多湿下で胞子形成が助長されるため夏季に低温多雨の年は，まん延しやすい。

防除法としては，チオファネートメチル水和剤・粉剤及びベノミル水和剤の散布が行われている。また，前年の被害茎葉の除去等ほ場の衛生管理に努めることも大切である。

カキクダアザミウマ

学名：*Liothrips* sp.

昭和50年５月，岡山県下のカキ園で初めて本虫の発生が確認された。その後，53年にはほぼ県下全域で被害が確認されて，現在までに，近畿，中四国地方の９府県にその発生が拡大している。

越冬成虫は，新梢の葉を加害する。被害葉は葉縁から中肋に向って巻き込んだ状態になり，被害部には最初直径0.2㎜ 前後の淡褐点が認められる。10日前後経過すると，被害葉全体が軽い火ぶくれ状となり，その後，褐変し，落葉するものも見られる。

果実の被害は，幼果とがくの接触部の近くに0.5㎜前後の黄褐色点が認められ，成熟すると果実の側面に赤褐色ないし黒褐色の斑点として残り，加害の激しいものは，この斑点が帯状となり，外観を著しく損う。

成虫は，体長2.2㎜前後，頭部・胸部・腹部はや

や光沢のある黒色，翅は薄膜半透明。卵は長さ0.4㎜前後の円筒形，幼虫は老熟すると体長1.8㎜前後，胴部は淡橙黄色，頭部・触角・脚・腹部第9・10節は黒色を呈する。蛹は体長2㎜前後，全体が乳橙色を帯びた半透明状である。

本虫は年1回の発生で，越冬成虫は4月中旬頃からカキの新梢へ飛来し，加害葉に産卵する。ふ化した幼虫は葉または果実を加害した後，その場所で蛹化し，次いで成虫となる。成虫は6月下旬頃からカキやアカマツの樹皮下に移動し，翌春まで潜伏する。

防除法は，越冬成虫がカキの新梢に寄生する時期にＭＥＰ剤等を散布するのが有効である。

ダイズの茎疫病

学名：*Phytophthora megasperma* var. *sojae* Hildebrand

英名：Soybean stem rot

本病は，昭和52年9月上旬，北海道十勝支庁池田町で，はじめて発生が認められ，その後，上川空知，十勝支庁管内の数町村に拡大し，山形県下でも発生が認められている。いずれも，水田利用再編対策等により水田からダイズ畑に転換されたほ場に発生しており，普通畑での発生は認められていない。

本病原菌は，疫病菌の一種でダイズにのみ特異的に強い病原性を示す。また，外国では病原性の分化した菌株（レース）の存在が報告されており我が国においてもレースの存在が推察されている。

6月上・中旬の発芽後間もない幼苗期から発病が見られる。はじめ胚軸が侵されて水浸状となりやがて病斑部が伸展して葉が萎ちょうし，苗立枯症状を呈する。開花期あるいは着莢期以降に発病すると，根部や主茎地際部を中心に，楕円形または紡錘形で，水浸状若しくは淡褐色の病斑が生じる。病斑は，湿潤条件下で拡大し，白粉状の菌そうが密生して，茎全体を覆うようになる。早期発病株は，生育が劣り，葉は黄化し，ついには枯死する。一般に湿潤条件下で病勢が著しく、乾燥条件下ではあまり病斑の拡大は見られない。

防除に当たっては，本菌の土壌中での生態調査有効農薬の開発等，今後の研究に待つところが多いが，本病が転換畑の滞水しやすい場所に多発していることから，高畦栽培や畦間に溝を掘る等ほ場の排水を促進させることにより被害を軽減させることができると考えられている。

ハラアカコブカミキリ

学名：*Moechotypa diphysis* Pascoe

本虫は，朝鮮半島，中国北東部，シベリア南東部に分布するカミキリムシで，我が国では長崎県対馬に分布することが知られていた。昭和52年9月大分県中部で本虫の発生及びシイタケほだ木での被害が確認され，その後，同県の発生は年々広がりを見せている。最近では，福岡，山口の両県でも被害が報告されている。

被害はクヌギ，コナラ等の小径木（直径8㎝以下）で幼虫が，樹皮下を食害することによる。幼虫はシイタケ菌糸の繁殖していない部分を食害するため，高密度に寄生した場合は，シイタケ菌の繁殖が望めなくなる。

成虫は，体長16～27㎜，体色は黒色，上翅背面の基部近くに隆起があり，その上に黒褐色の剛毛を密生する。腹部には赤褐色の毛斑が左右対称に散在する。幼虫は，体長20～28㎜，腹部背面の第9節末端に一対の小鉤を有する点で，他のカミキリの幼虫と区別できる。蛹の体長は，幼虫とほぼ同様である。

本虫は年1回の発生で，落葉の間や野伏したほだ木にかける笠木の枝葉の間等で，越冬した成虫は，春，気温の上昇とともに活動を開始し，いろいろな樹種の古い樹皮を食害し，交尾を行い，クヌギ，コナラ等の小径木に産卵する。成虫の羽化脱出は9月上旬～10月下旬頃までである。

本虫の防除法としては，①シイタケほだ木の伏込地を前年の被害地からできるだけ離す，②ほだ木には防虫ネットをかけ，産卵させないようにする，③シイタケ菌をできるだけ早く樹皮下に繁殖させる等があげられる。

農林水産省